

IV 遺物

1. 土器類

A 奈良時代の土器

土器類は調査区全域から出土したが、その量は概して少ない。それは調査地一帯が15世紀以降に土採集の場となり、奈良時代の遺構の多くが削られたことによる。そのため、奈良時代の遺構に伴う土器は少ない。ここでは、4基の井戸から出土した土器を中心に述べよう。

SE 395 出土土器 (fig.17-1~14) 井戸枠内から出土した器種には土師器杯A・碗C・皿A・C・高杯・甕A、須恵器杯A・B・杯B蓋・壺A・壺蓋・甕がある。これらは平城宮SK 820出土土器と共通する内容をもち⁽²⁾(750年頃)。掘形からは小片であるが土師器杯A・皿A・高杯・鉢B・甕A、須恵器杯A・B・杯B蓋・鉢A・甕Aなどが出土。これらは平城京左京1条3坊遺跡の溝SD 485出土土器(730年頃)と共通する⁽³⁾。以下、井戸枠内の土器につき述べる。

土師器 杯A(1・2)は平らな底部に、開いた口縁部がたちあがる。口縁部外面は横ナデし、底部外面はへう削りする。内面は全面横ナデ。口縁部の1箇所に煤が付着。灯火器として使用したものか。2は口縁部を横ナデし、底部は不調整。内面に螺旋斜放射暗文がある。碗C(3・4)は口縁部外面上部を横ナデする。4はそれ以下が不調整のようだが、遺存状態が悪く、口縁部外面上部の他、調整状況は不詳。皿C(5・6・7)は口縁部外面を横ナデし、底部外面は不調整である。いずれにも指頭圧痕を多く残す。6・7は、口縁部と底部の境に稜をもち、口縁部は外反気味にたちあがる。甕A(8)は大きく外反する口縁部と、卵形の体部から成る。口縁端部は外傾する。胴部は磨滅しているが刷毛目調整の痕を留める。壺A(9)は肩の張った器体に直立する短い口縁部をつける。底部には高台を付す。口縁部内外面は横ナデし、胴部はへう磨きを施す。

須恵器 杯A(10・11・12)は平らな底部に開いた口縁部がたちあがる。口径から杯AⅠ(10、口径20cm)と杯AⅢ(11・12-口径16cm前後)に分けられる。いずれも底部外面へう切りのままである。口縁部内外面にロクロナデをおこない、底部内面はナデる。杯B蓋(13)は笠形で頂部の中心につまみをつけ、縁端部が短く直立する。頂部をロクロへう削りし、つまみを付した後、ロクロナデする。内面もロクロナデ。壺蓋(14)は平坦な頂部に垂直で深い口縁部をつける。つまみは扁平で中心が微かに隆起する。表面には自然釉が広くかかる。頂部外面はロクロへう削り、内面はナデ。口縁部はロクロナデ調整とする。

SE 394 出土土器 (fig.18-15~19) 井戸枠内出土土器には土師器碗C・皿A・C・高杯・壺B・甕A、須恵器杯B・杯B蓋・皿E・鉢D・壺A・甕がある(780年頃)。この他、製塩土器と思われる粗製土器がある。

土師器 碗C(15)は内面と口縁部外面上部を横ナデする。外面全面に粗いへう磨きをおこなう

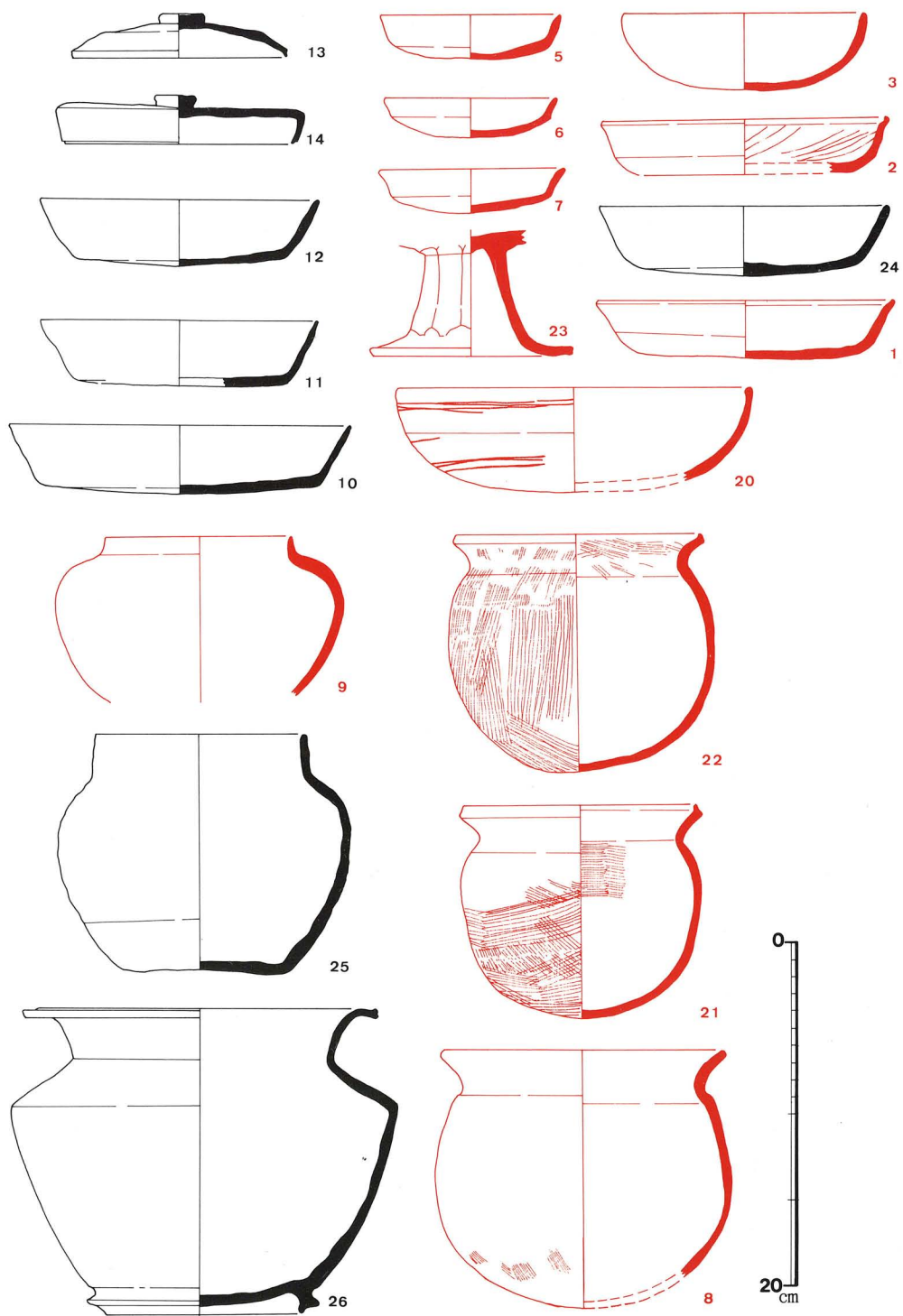


fig. 17 土器実測図1 S E 395出土(1~14) S E 393出土(20~26)

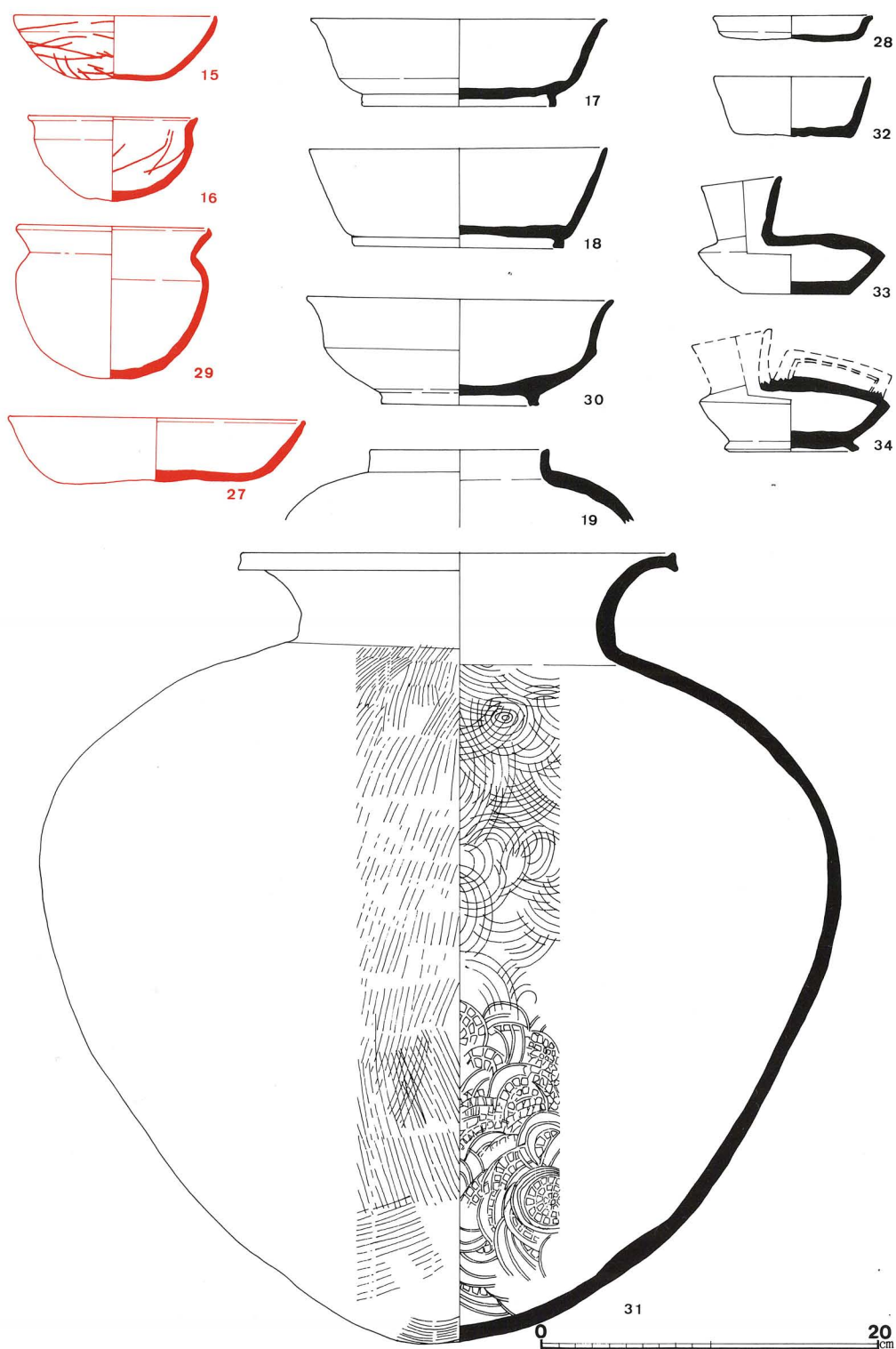


fig. 18 土器実測図2 SE 394出土(15~19) SE 391出土(27~31) その他の遺構出土(32~34)

が、指頭圧痕が全体に残る。また外面に粘土紐巻き上げ痕跡をとどめる。壺B(16)は広口で丸底につくる小型土器である。口縁部内外面は横ナデ調整。胴内面は、ヘラ状工具で削ったのち、横ナデ調整する。胴部外面は不調整で、粘土紐の痕跡、指頭圧痕をとどめる。人面を墨書きする小型壺と共通の特徴をもつ⁽⁴⁾。

須恵器 杯B(17・18)は杯Aに高台をつけた器である。口縁端部が外方に小さくつまみ出されるもの(17)と、端部がまるくおさまるもの(18)がある。底部外面の調整には、ロクロヘラ削りのもの(17)とヘラ切りの後ナデを施すもの(18)がある。両者とも口縁部内外面はロクロナデをおこなう。壺A(19)は肩の張った器体に直立した短い口縁をつける。肩の張りは14ほど強くない。肩部以下を欠失している。

S E 393 出土土器 (fig. 17 - 20~26) 土師器鉢B・高杯A・甕、須恵器杯A・壺A・Cがある。

土師器 鉢B(20)は内面と口縁部外面上部を横ナデする。以下はヘラ削りののち、あらいヘラ磨きをおこなう。甕A(21・22)は外反する口縁部とまるい体部とからなる。口縁部は内外とも横ナデによって調整する。口縁部から体部へかけて強く屈曲している。20は体部外面を横方向や斜め方向の刷毛目調整。内面は横方向に刷毛目調整する。胴部外面には煤が付着。21は胴部外面を縦方向の刷毛目調整。口縁部内面を刷毛目調整し、胴部内面はナデで調整する。両者ともほぼ完型で、胴部外面に煤が付着。高杯A(23)は脚部だけの破片。太い脚柱と裾部とからなる。脚部の外面はヘラで10面の面取りを行なう。内面は不調整である。裾部の内外面は横ナデ仕上げとする。杯部内面には螺旋暗文がある。

須恵器 杯A(24)は底部外面はヘラ切りのままである。壺B(25)はさほど肩の張らない胴部に、直立する口縁をつける。底部ちかくの胴部外面はヘラ削り。底部はナデ調整を加える。壺O(26)は肩が張り、稜角をなす低い胴部に、外反する広口の頸部と外傾する高台をつける。胴部内外面ともロクロナデをおこなう。

S E 396 出土土器 (fig. 18 - 27~31) 井戸枳内の土器には土師器杯A・皿C・高杯・壺E・甕A、須恵器杯A・Bがあり(780年頃)、掘形からは土師器杯A・甕・ミニチュア小壺、須恵器杯B蓋・甕B・C(750年頃)が出土。これらはいずれも小片である。

土師器 杯A(27)は口縁部外面の全面をヘラ削りする。内面は全面横ナデ。皿C(28)は口縁部外面上部を横ナデする。底部は磨滅しているが不調整のようである。口縁部の一部に煤が付着。甕A(29)は広口で丸底に作る小型の器。口縁部内外面ともロクロナデ調整する。胴部内外面に煤が付着し、とくに外面は著るしい。断面の色調は、二次的な火を受けたためか土師器同様、灰褐色を呈す。土師器として扱ったが、須恵器の可能性もある。

須恵器 杯B(30)は深い杯部中央に稜をもって外反する口縁部をもち、稜腕に似た器形。底部に高台がつく。内外面ともロクロナデ調整とするが、底部外面はロクロヘラ削り調整もする。

またここには判読不能の墨書がある。緻密な胎土と器形から、播磨産と考えられる。甕A(31)は⁽⁵⁾

肩がまるく張った長手の器体と、大きく広くひらく口頸部とを備えた器形。外面は縦方向の叩きの後、横方向のカキ目調整をする。内面に当板の同心円文をとどめるが、器体の上半と下半とで種類が異なる。

その他の遺構出土土器 (fig. 18-32~34)

多くの器種があり、二彩小壺なども含む。ここでは須恵器杯A・平瓶について述べる。

須恵器杯A 32は小型の器で、口縁部内外面はロクロナデを行ない、底部外面はヘラ切りのままとする。S D 380 出土。平瓶 (33・34) はいずれも小型品である。平坦な上面と体部側面との間に稜をもつ。体部に円板を貼りつけて上面を作り、一方に偏した位置に円孔を穿って口頸部を接合する。34には把手と高台がつく。33はS B 404の柱掘形、34はS D 405 出土。

B 中世の土器 (fig. 19-1~7)

土師器の小皿・土釜、瓦質の火舎・摺鉢⁽⁶⁾、瓦器碗が出土している。

土釜 (1・2・3) は、内傾する口縁部とまるい体部とからなる。口縁端部は外方に折り返すものと、上端を浅く凹ませる二種がある。口縁部内外面および罅部に横ナデを、体部内外面にナデ調整を行なう。器壁は薄く、胎土も精選している。罅は口縁部近くに貼りつける。1の罅断面は三角形を呈し、機能的でない。1はS E 393、2はS K 410、3はS K 409 出土。火舎 (4)は短い三足をもつ平らな底部に外傾する体部をもち、口縁部は外開きとなる。口縁部内外面を横ナデし、内面はさらに横方向のヘラ磨きを粗く施す。体部外面には縦方向のヘラ磨きを施し、内面は横方向の調整。底部外面は不調整である。S K 408。摺鉢 (5)は平らな底部に大きく外傾する体部をもち、口縁部に片口をつける。内面は口縁部のみ横ナデ調整を施し、縦方向に7条を1単位とした摺り目を放射状に11箇所施す。包含層出土。以上の土器はいずれも蔵骨器として用いられたものであり、その年代は15世紀前半に位置づけることができる。瓦器碗 (6・7)は浅い碗で、断面三角形の低い痕跡程度の高台を貼りつける。内面と口縁部外面を横ナデした後、ヘラ磨きを粗く行なう。7は外面に指頭の圧痕が残る。底部外面は不調整。底部内面に螺旋暗文を施す。

今回出土した中世土器は、土釜が多く、碗・皿など他の器種が非常に少ない。この土釜は、火に懸けた痕がみられないことや焼け歪んでヒビの入った例が存在すること、土壌S K 409、410から埋納された状況で出土したことからみて、日常什器ではなく蔵骨器として用いられたのであろう。土釜を蔵骨器として用いた例は奈良市内の元興寺極楽坊境内遺跡⁽⁷⁾や古市城跡⁽⁸⁾にある。両遺跡出土の土釜には、死去の年月日を墨書したのがあり、土釜編年の重要な資料となっている。本遺跡出土の土釜には墨書等は認められなかったが、両遺跡の資料をもとに、その年代を15世紀前半を中心とした頃と推定しておく。



fig. 19 土馬 土馬は水神に捧げるため、溝や井戸におさめたとされる。

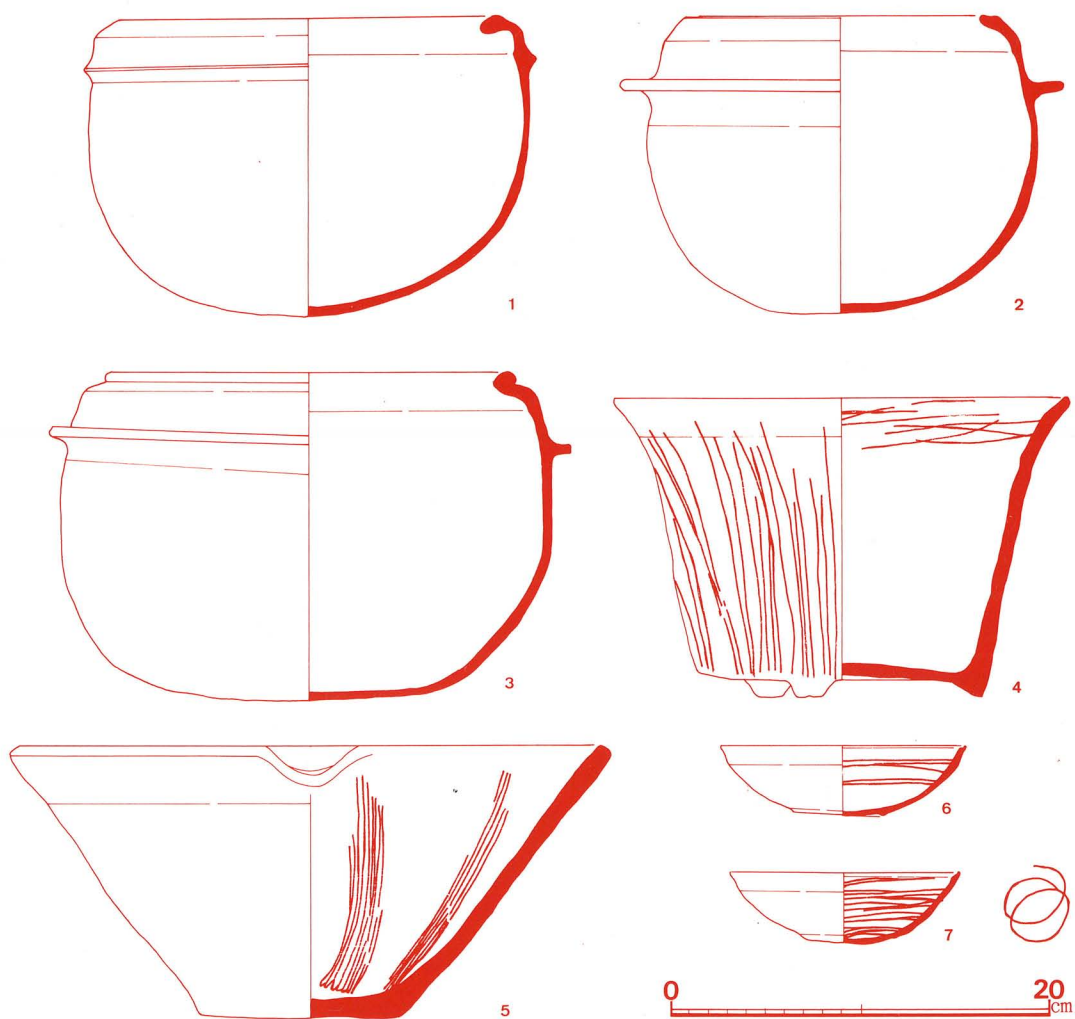


fig. 20 中世土器実測図 S E 393出土(1) S K 410出土(2) S K 409出土(3) S K 408出土(4)
その他の遺構出土(5~7)

C 土 馬

井戸S E 395の埋土上層から2点出土した。うち1点は左後足が折れていたが体部は完存していた (fig.19)。他は足の一部のみ。完存例は、鞍を表現したいわゆる飾り馬。前足、後足ともにV字形に開き、首は扁平で斜め上方に立つ。胴は短く、断面楕円形に作る。尾は先端を尖がらせはねあげる。頭部に円板状の顔面を貼りつけ、竹管で眼をあらわし、耳は粘土板を貼りつける。鞍は胴部上面をくばませて表現する。全面を丁寧に磨く。全長17.2cm、通高15.7cm。奈良時代中葉のものである。土馬は溝や沼、井戸など水に関係した場所から出土することが多く、水に関連した祭祀に用いたとされている。『続日本紀』慶雲2年6月27日条に市で雨乞いした記事があり、出土した土馬もこうした行為との関連性を考えることもできる。ただし、水野正好氏は、馬は崇り神の乗物であるとし、上述の解釈とは異なる説を提出されている。

- 1 器種の分類は奈文研の分類法による。
- 2 奈文研『平城宮発掘調査報告』Ⅶ 1976 P139
- 3 奈文研『平城宮発掘調査報告』Ⅵ 1974 P144
- 4 巽淳一郎「平城京における墨書人面土器祭祀」(『古代研究』24)
- 5 兵庫県教育委員会「上原田遺跡」『播但連絡有料自動車道建設にかかる埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 1980
- 6 この器種名は、火鉢形、火消壺形の別称がある。
- 7 『日本仏教民俗基礎資料集成』1 1976 (中央公論美術出版)
- 8 奈良市教育委員会「古市城跡発掘調査報告」
(『昭和55年度奈良市埋蔵文化財調査報告書』)



fig. 21 土釜の出土状態



fig. 22 中世の土器

2. 木製品・金属製品

多
種
な
製
品

木製品の総数は300点余り、その大半は井戸杵木で、その他、八条大路北側溝S D 380から曲物底板4 (fig. 23-3)・木皿1・横櫛1、井戸S E 394から曲物底板2・同側板・横櫛2・尖頭棒1、S E 394上層の土層から方形板1 (同・4)・角材1・柄杓 (同-6)、S E 393から曲物側板・尖頭棒1・塔婆形木製品1 (同・5)、S E 395から曲物底板1・刀子状木製品1 (同-1)、S E 396から削りかけ1 (同1-2)などが出土。また、S E 395の杵木は、多足机天板 (fig. 24-1)と棚板 (同-2)を転用。金属製品はS D 380から和同銭1・神功開宝2・帯金具1 (fig. 12-1)、S E 394から和同銭1・神功開宝1 (同-4) S E 396から和同銭1 (同-3)、Cトレンチからようらく璽珞 (同-2)など出土。

刀子状木製品 (fig. 23-1) 全長19.3cm、幅1.3cm。ヒノキ板目材を削り切先は鋭く刃状に、茎は三角形に、背はやや丸味をもつように仕上げる。

祭
記
具

削りかけ (同-2) は、現存長12.7cm、幅1.8cm。ヒノキ杵目の割り材で、上端を圭頭状に作り、上端近くの両側辺に各1ヶ所切り込みを入れる。

曲物底板 (同-3) 復原径15cm。ヒノキ杵目材で、側板を木釘で留めた痕跡がある。他の曲物底板の復原径は、15・16.5cm (S D 380)、19・23cm (S E 394)、22cm (SE395)で、いずれも側板を木釘で留める。

方形板 (同-4) 9.8×8.5 1.0cmのヒノキ杵目材。中央2ヶ所に木釘を打ち込む。33.0×3.8×2.0の角材で、両端近くに2ヶ所穿孔したものが共伴した。

仮
名
書
き
塔
婆

塔婆形木製品 (同-5) 全長76.0cm、幅3.1cm。ヒノキ杵目材で、上半部の両側辺各10ヶ所を切り欠き、上端の側辺を切りこむ。下端は尖らせる。両面にひらがな様の墨書があるが解読できない。時期は中世である。

柄杓 (同-6) 全長70.7cmのスギ材で、先端および先端から13cmのところが磨耗し、曲物柄杓の柄と考える。以上、fig. 23-4～6は中世のものである。

机の復原

多足机天板 (fig. 24-1) 現存長64cm、幅48cm、厚2cmのヒノキ杵目材、短辺から7cmのところに高1cm、幅6.2cmの台形の脚座を作り出し、脚をさし込む方形の柄穴を7箇所穿つ。正倉院には18・22・26・28・32足の多足机

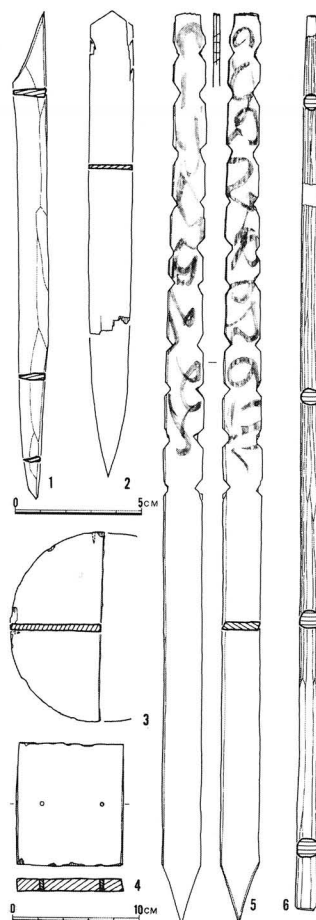


fig. 23 木製品実測図

- | | |
|------------------|----------------|
| 1 刀子状木製品 (SE395) | 2 削りかけ (SE396) |
| 3 曲物底板 (SD380) | 4 方形板 (SE394) |
| 5 塔婆形木製品 (SE393) | 6 柄杓 (SE394) |

があり、それを参考に、本例は18足、幅68.8cmと復原した。正倉院の多足机は、各列の端から2番目の脚、計4脚は天板上面に貫通し、上から楔で留める点本例と異なる。

棚板 (fig. 24) 133×59×3 cm のヒノキ板目材の短辺4隅に、長さ25cm以上、幅5～6 cmの突起をつくりだし、4ヶ所に4×6 cm前後の枘穴を貫通させる。

金属製品
帯金具 (fig. 12-1) ^{くろつくりのとしおび} 烏油腰帯の巡方で、表面に黒漆膜が残る。表金具は2.12×1.75×0.19 cmで、裏面4隅のやや下寄りに鉋足を鋳出す。裏金具は2.04×1.75×0.14 cmで、4隅の小孔に鉋先を貫通させる。下寄りの長方形透しは1.66×0.60 cm、表裏両金具の透間は0.25 cmである。分析では銅製で、鉛5%前後を含み、錫の含有は痕跡程度である。

環珞 (同-2) ^{さ は り} 佐波理容器の破片を転用したもので、周囲を切断して2.87×2.54 cmの隅丸方形に整形し、上端中央に小孔を穿つ。錫・銅から成り、鉛は含まない。

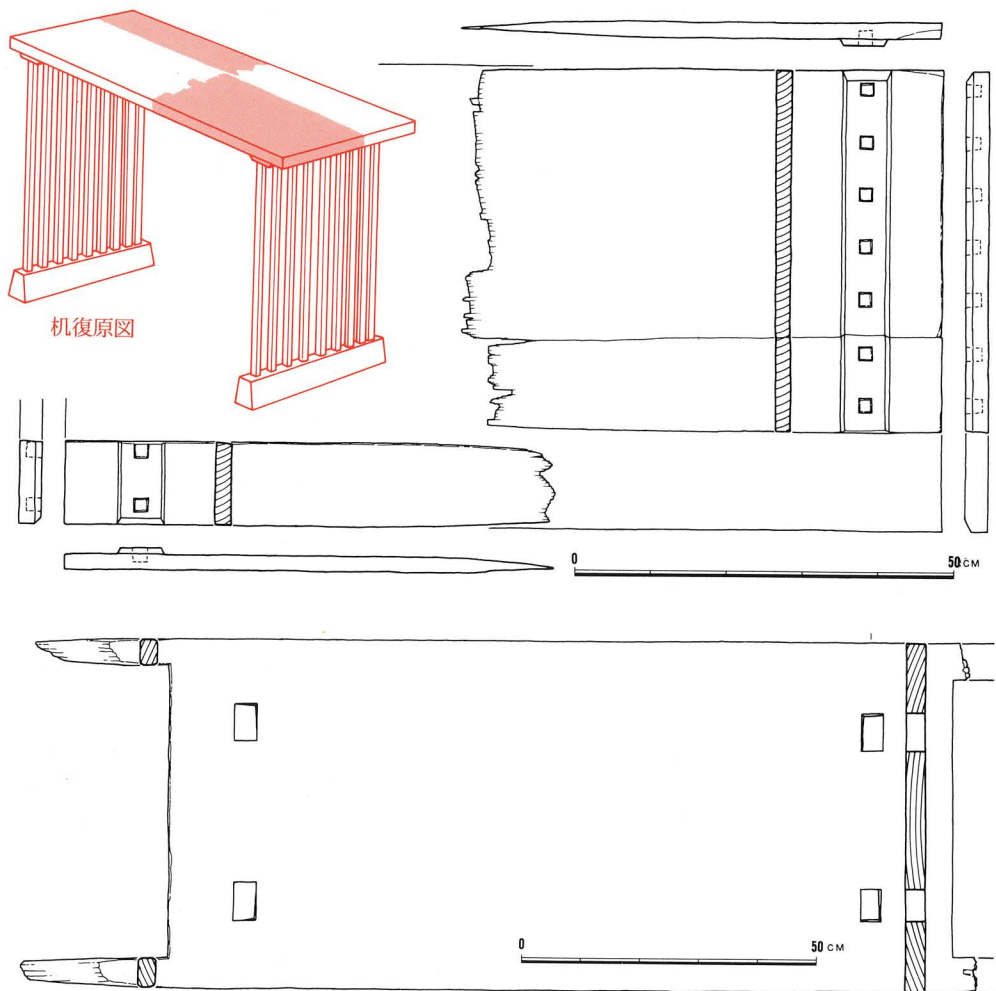


fig. 24 多足机・棚板状木製品